

## 「彼岸に繋ぐ」

2009/07/16

風なんか吹かない場所なのに、大王が足を踏み入れた途端  
いつせいに華が揺らいだのを見た。

ざわり、騒ぐ音に歓迎されたのか拒絶されたのかわからな  
くとも、それは確かな変化だった。

異様に息をのんで立ちつくす。アンタはあっけなく僕を  
置き去りにして、迷いのない足取りですいと彼岸の華をわけ  
て通る。

腰の辺りまで伸びた華だから、まるで紅い海を泳ぐようだ。  
ざわりざわりと揺れ続ける華に合わせて、僕は握った拳で  
騒いで止まない胸を押さえた。

ついさつきまではアンタと繋がっていた手のひらだ。今は、  
こんなに物足りない。

一度開いて、また握った。

大王の黒衣はこの紅い海の中ではどうしたって異質だった  
から、見失うことはないのだろう。

それでもはぐれてしまわないようにと、僕は懸命に紅い華  
をかきわけて後を追った。

また明日ね、と昨日、確かに閻魔王はそう言った。

仕事も終わり、別れ際の場面だった。

明日は、と言いかけた僕はじっと見つめてくる視線にとっ  
さに口を閉ざす。

こくりと呼吸をひとつ飲み込んだ。

大王が真つ直ぐに僕を見据えていた。口元が笑っているの  
に視線は笑わなくて、じっと何かを待っているようだった。

へらへらといつものふざけた雰囲気は薄くて、代わりに触  
れれば切れてしまいそうなくらい、鋭い空気を感じていた。

ああこの人の本質はどちらなのだろうと、時々感じるよう  
にその時も思っ、いつものようにすぐに忘れることにした。  
理解しようと、思うことすらおこがましい。本当は。

それくらい自分からは、想像も及ばないくらい遥かな人な  
のだ。そう自身に言い聞かせてみた。

実感はわかなくともそれはひとつの事実として腹の底に落  
ち着く。

ただ普段は忘れていられることを思い出したせい、少し  
だけ憂鬱にも似た心地になった。

ぐ、と意識して手のひらを握って、正面から視線を受け止  
める。

無理に、笑った。

きつと緊張しているのがばれられた。

「また、明日」

大王の目元が緩んだのを見て、僕は彼の言葉を正しく理解できたのだと安心した。

だから扉を開けて、さようならとおやすみなさいを残して外に出る。

じゃあね、と返る声はもうやわらかだった。

そして今朝。

寝起きにあまり強くない僕はそれでも何とか布団から這い出て、時刻といっしょに暦を確認した。いつものくせだ。

指折り数えてやっばり今日がその日だと知る。

それでも昨日の約束を忘れたわけではない。

いつものように支度をして、いつもの時間で部屋を出た。

朝の閻魔庁というものはいつだってたいい静かなところだ。死んだ者しかいないのだから当然だ。騒がしいのは生きてるやつか、死んだことを自覚できない死人の魂ばかり。裁きを待つ死者は大体これだから、たまにイラついたりうんざりしたりしている。

まあそれにしたって、今朝の静けさは若干めずらしいもの

だけだ。

それこそ、死んだように静まり返った廊下で一人足音を鳴らした。

やがてたどりついた執務室の前で扉をたたいて、返事を待たずに開け放つ。

「おはよう」

机に軽く腰を預けて、こちらを向いた姿勢で大王が言った。やたらと楽しい表情で僕の目の前まで歩み寄って、にい、と顔を近づける。

「今日、お休みだよ鬼男君。忘れちゃった？」

「まさか」

くすくすと笑っている。きらきらと目を光らせて。

何を言っただけのほしいのかがわかるから、言葉は簡単に出てきた。

「アンタに会いに来たんですよ」

大王は、満足そうに目を細めていた。

与えられることが当たり前と知っている表情だった。

この人の傲慢にも似た確信が僕は嫌いではない。

それは力がある者だけに許される余裕だ。

まるで練り人形のように支配されているのを感じる、この感情も表情も行動も。

それが心地好いと思う時点でもう逃れることは出来ないの  
だろう。

するりと指の間に指をすべり込ませて、手のひらを合わせた大王は喉をそらして僕を見上げた。

さらされる白い首筋に、努めて無表情を作ってみたけれど、じゃあ頬が熱いのはどうやって隠したらいいのか僕は知らない。

「じゃあ、デートしよっか？」

そう望まれた気がしたから、軽く、触れるだけの口付けをした。大王が目を閉じてくれたから、何となくほっとする。

「お供しますよ」

耳元に唇を寄せて囁いて、ついでにそこにも口付けた。

ふふん、と得意げに笑う音に僕も目をつむった。

そして連れられたのは、彼岸花の咲き乱れる場所だった。

「華は死人の魂の宿」

手をつないだまま歩いた。遠くからでもはっきりとわかる紅は、どこまでも続いているようにさえ見えた。

この紅に果てはあるのだろうかと思ふ。少なくとも今確認することはできない。もっとずっと、遠いところの紅の地平線が見えている。

僕はとなりの人を見たけれど、大王は僕を見なかった。

代わりに手が握りなおされて、面映そうなくすくすくしたような微笑みが浮かんだ。

視線はずっと前に向けられている。

「彼岸花は、特にね。死人花つて顕界の人間は言うみたいだけど、それは正しいのかもしれないね」

だからこんなに妖しくて、美しくて。

「私はこの華が好きなんだ」

大王がうつりと呟いて、ふいに手が解かれた。

あまりに自然な動作で反応する暇もない。

そのままくると僕の前に回り込み、両腕を広げて目の

紅い華を示す。

朝からずっと貼り付いている、得意げな笑みは揺らぐに  
いっそう深いものに変わる。

「鬼男君、今からいいものを見せてあげるよ」

にんまりと。

大王は僕を置き去りにして、彼岸の海を泳ぐように、その  
紅い華をわけて通る。

黒衣はその色と相容れずに確かな存在として点になる。

いいもの、が何なのか、想像もできない僕は大王を追い  
かける。

ざわざわと騒ぐ音が、まるで泣いているようにさえ聞こ  
え始めた。

風なんかひとつも吹かない場所なのだ。それなのに、華は  
揺れて波を作る。

その中心はきつとアンタなのだろう。

これから何が起るのかと突き抜けるような不安を感じた。  
手をつないだままできてくれたら、どんなことでも気にな  
らないのに。

たぶんそれは無意識だった。自覚して、その甘えに顔を  
かめて舌をうった。

アンタはそんな僕の気持ちにはきつと気付かない。悠々と  
足取りは乱れない。

それがいいことなのか、嫌なことなのか、文句を言うべき  
なのかさえも一瞬迷った。

次の瞬間には何もかもがどうでも良くなる。

とにかくアンタに追いついてその腕を掴み引き寄せて、僕  
の方を向かせたいと思った。

だから僕は歩調を強めて。

その人は。

両の腕を広げて、ふわふわと、舞うような足取りで進んで。

どこへ、とも決めずにきつと、気の向くままに。

距離をとって後を追う、僕の耳に音が届いた。

朗々と。

聴いたことのない音だった。

聞いたことのない言葉だった。

古めかしい言葉遣い、意味まではとっさに頭に入ってこな

い。

ただただ絶対的だった。

意味は通らず、旋律が通る。

そういうえばこの場所は風さえ吹いていない。

そしてさつきまであんなにも騒いでいた華が静まり返って  
いることに気付いて鳥肌が立った。

群生する紅はもう幽かな音すらさせない。

ただただ放たれ続ける歌に聞き入るように静まり返って  
いた。

朝の閻魔庁を思い出した。

世界が死に絶えたような静寂だと思った。

そんな中、どこまでも染み入るような自然さで放たれる音  
が、大王の声だと気がつくのに随分と時間がかかった。

僕の見つめる先で大王は腕を広げて時にくるりとまわり、  
楽しそうに、うれしそうに、幸福そうに透明な音を発し続け  
ていた。

それでもどこかさみしげな音に聞こえてしまつて、参る。

知らずに止めた呼吸が苦しくて、ぎこちなく深呼吸。腫つ  
た腫も痛かった。体がこわばつて、立っていることさえなげ  
だか困難だ。

このまま倒れ込んでしまつてもきつと華が受け止めてくれ  
る。

見上げる視界は紅く染まり、きつと空が千切れて見える。

その有様を想い描く。想像は優しく安らかだ。きつとそ  
れは心地がいい。

それでも僕がこの場に立ち尽くしているのは、ひとえに大  
王の存在があるからだ。

倒れ込んだ視界にはアンタがいなくなる。

それは、なんだか嫌なのだ。

揺らぎそうになる、くじけそうになる足に力を込めて、腕  
を広げた大王を見つめる。

大王は空を仰ぐ角度で顔をあげて、僕に背を向けたままだ。

その視線の先の空と足元から伸びる華の色彩の差と鮮やか  
さに、目が眩んで涙がにじむ。

朗々と、朗々と、歌がうたわれた。

「どうだった？」

弾む声に瞬きをして、あわてて焦点を合わせた。

やつぱり笑った顔が目前にある。この人はいつまでも笑つ  
ている。この表情を崩してやりたいと一瞬強く感じた。

知らずに拳を握りしめていた。

緊張したときの僕の悪い癖だった。

その拳を、両手でそつと包まれる。

冷たい手のひらだ。あまりに白い手のひらに、血は通つて

いるのだろうかと思議に思った。

「どうしたの、鬼男君。ぼーっとしちやつて、そんなに良かった？」

くすくすと笑われるとなんだか気恥ずかしくてたまらない。すり、と握られた手の甲を撫でられる。二の腕まで何かむずがゆい、くすぐったいような感覚が走って、とっさに目を閉じてそれをやり過ごそうとする。

「だけどやさしく、やさしく、握りこんだ拳を解すように何度も撫でられて、表情が制御できずに歪んでしまう。頬がひきつる、そして熱い。」

「それとも、魂でも消えちゃった？」

魂消たつて言うんだつて、呟いて、アンタは真つ直ぐに僕を視線で射抜いて笑う。そんなに真つ直ぐに笑わないでほしい。顔どころか全身が熱いく感じて、なんだかいたたまれない。

「思わず、あからさまに視線を逸らしてしまった。」

「しまった、と思つてももう遅くて、取り繕う余裕さえ僕にはない。」

「くすくすと笑い声が鼓膜を揺らす。」

「そんなに真つ直ぐに見つめないでほしい。」

雄弁すぎるアンタの瞳には時々訳もなく恥ずかしくなる。繋かれた手を意識する。

逸らした視線の先の華の紅に、あまり何も考えずに口を開く。

「……………いいものつて、」

「うん？」

「今の、うたのことですか？」

「……………あとは、この華の渦かな」

「壮観でしょ、と大王が言った。」

「馬鹿みたいに奇麗でしょう、と。」

「それには同意して、こくりと頷く。」

「なんだかきちんとこの場に立っていることが億劫なくらいに、全身がだるくて重たかった。」

「その僕の様子にか大王が、そんなに私の歌は良かったの、ともう一度言つて、僕の手を撫でたままくくと喉を鳴らした。」

「君が望むならいつだつて歌つてあげる」

「楽しそうにうれしそうに幸福そうに、そのくせほんの少しのさみしさを滲ませた声で囁かれた。なんて器用なやつなんだ、といっそ僕は呆れてみる。」

「子守唄でもいいよ、とからかうその口元がふつと結ばれて、」

白い指が対照的に浅黒い僕の肌をたどる。

指先が触れていった場所に唇が落とされて、ついに僕は握りこんだ拳を解いた。

待ち構えていたようにするりと、指の間に指がすべらされる。

手のひらが合わされて、ため息を吐いてしまったことには後から気付いた。

気付いて、やっぱり恥ずかしくなるけどもうどうしようもない。

どうしたって僕ではアンタにかなわないのだ。

いつだってそう、どうしたってそう、結末は同じ。

アンタに全部をのぞかれて暴かれて目前に広げてさらされる感覚。

支配されているのを感じて、でもそれが心地好いと思ってしまうているのなら、もう、どうしようもないだろう。

僕はもう、どうしようもないくらいにこの人が好き、だから。

「君が望むならいつだって、どこまでだってさらってあげるよ」

こんな風な彼岸の彼方までだって。

君の心も体も魂も。

しあわせでしようと歌うように言ってくれた、その唇を確

かめたくて吸い付いた。

あらかじめ差し出された舌がまるで受け入れてくれるようで、くらりと脳の芯が揺れる。

空いた片手を腰にまわして引き寄せた。ぎゅう、と力を込めると、アンタも僕の背中に手のひらを当ててすがりつくように抱いてくれる。衣の布を握り込む抱き方にどこまでも深く満たされる。

繋いだままの手のひらはもう、さみしくなかなかった。

そうして唇を合わせたまま、またアンタを中心に紅い華が騒ぎ始めるのを聞いた。

せめてアンタにこのどうしようもない気持ち思い知らせてやりたくて、僕はずっと、片手から熱を伝え続けて繋いでいた。